

社団法人日本超音波医学会第85回学術集会を終えて

会長 森安 史典

(東京医科大学 消化器内科 主任教授)

日本超音波医学会第85回学術集会は、2012年5月25日から同27日までの3日間、東京都品川区のグランドプリンスホテル新高輪で開催されました。今回の学術集会は、日本超音波医学会設立50周年を記念する学術集会でもあり、学術集会会長を拝命して大変光栄に思うと同時に、重責に応えられるか不安もありました。しかしながら、従来の参加者を大幅に超える4,400余名の参加があり、盛会裏に学術集会を終えることができました。これも、ひとえに日本超音波医学会の役員ならびに会員の皆様のご支援、ご協力の賜と思ひ、紙上をお借りして深甚なる感謝の意を表したいと思ひます。本紙では、第85回学術集会の準備から終了までを振り返ってみたいと思ひます。

1. テーマ

第85回の学術集会のテーマは、“Passion”としました。日本超音波医学会は、消化器や循環器といった臨床の多くの領域を含み、また基礎工学からの参加も多くあります。臨床においては、医師のみならず検査技師の参加数も増加傾向にあります。このような多くの職種、研究分野からの参加者を、超音波医学の研究や臨床に駆り立てる共通するモチベーションは“Passion”である、という考えから、“Passion”を今回のテーマといたしました。

近年医師の超音波離れがささやかれる中、今までで最多の演題数をいただき、また大幅な参加者数の記録更新が見られたことから、超音波医学に寄せる会員のPassionが燃え続けていることを感じることができました。

今回の学術発表では乳腺を代表とする多くの領域で優れた発表と熱いディスカッションが見られましたし、また新しい領域である整形外科のハンズオンや教育セッションでは、聴講者の技術・知識の習得への強い熱意を感じるすることができました。

2. 会場

第83回学術集会は京都の国際会議場という、自

然に囲まれかつ古都が控えたすばらしい会場で行なわれました。第84回はグランドプリンス新高輪ホテルで開催され、第85回も同じ会場ということで、参加者にとって魅力に欠けるのではという批判もありました。しかし、グランドプリンス新高輪ホテルは、4,000人程度の参加者にはほどよい会場であり、また会場を取り囲むように、庭園やホテルが配置され、「学術集会に参加した」という満足感と言いますか、連帯感のようなものを感じさせる会場と思います。また、品川という交通至便で周辺環境もいろんな意味でよいということも参加者が増加した要因の一つであったと考えております(図1)。

2年前に会場を決めたとき、世界循環器病学会が日本で開催される可能性がありました。その場合の開催時期が本学術集会と重なるということもあり、グランドプリンス新高輪ホテルを仮予約はしたものの、その期間を逃すとこのホテルでは予約が取れないということでひやひやものでした。幸い、といっは循環器関係の先生に怒られそうですが、世界循環器病学会の日本開催がなくなり、予定通りグランドプリンス新高輪ホテルで開催できる運びとなりました。

3. プログラム

プログラム作成に当たっては、学術集会実行委員会の皆様が大変お世話になりました。各領域ならび



図1



図 2

に領域横断的な特別企画の立案など、多大なご尽力をいただき、これが成功裏に学術集会を開催できた最大の要因と、深く感謝いたします。第1回の実行委員会を第84回の学術集会の会期中に会場をお借りして開催し、それ以降は、企画立案、演題公募、演題選定、プログラム作成と、領域毎の分科会でお図り頂き準備を進めて参りました。多くの領域の専門家が集まる日本超音波医学会ならではのプログラム作成であり、全体をハーモナイゼーションすることの難しさもここにあると言えます。

プログラム作成の最後の段階では、領域の重なりを極力少なくするタイムスケジュールの配慮が必要であり、事務局長の今井康晴准教授のご苦勞は大変なものでした。各領域の先生方のご指導、ご意見により、無事プログラムを組むことができました。プログラムの骨格が固まったとき、ほぼ成功が見えた気になるものです。

4. 特別企画

前述したように、第85回学術集会が開催された2012年は、日本超音波医学会創立50周年に当たり、いわば日本超音波医学会50周年記念学術集会とも言えるものでした。そのため、千田彰一理事長、50周年記念企画委員長の中谷敏理事、総務担当の谷口信行理事を中心として50周年記念特別企画が立案されました。教育講演「超音波医学、過去・現在・未来」が会期2日目に開催され、引き続き、シンポジウム「今後の超音波医学の発展のために」が同じ

く第1会場で行なわれました。シンポジウムでは、前文部科学省高等教育局医学教育課大学病院支援室長で、国立大学財務・経営センター理事の玉上晃氏の講演があり、大学を中心とした日本の研究の将来展望について講演とディスカッションがありました。

50周年特別企画のもうひとつは、展示の企画でした。機器展示会場の入り口近くに特別展示のスペースを設け、日本超音波医学会の50年史を示すパネルが展示されました。またマイルストーンとなる超音波診断装置が展示され、参加者の目を引いていました。この50周年特別展示によって、第85回学術集会のステータスが上がったという評価が多く聞かれました。

会長講演としては、竹原靖明先生のご司会のもとに、「超音波は組織を叩くこと」と題してお話をさせていただきました。私が初めて超音波と出会った1975年は、私が医学部を卒業して医師になった年でもあります。電子スキャンが開発され臨床応用された年でした。X線CTの画像が出始めた頃で、電子スキャンによってリアルタイムに映し出された、初めて目にする脾臓の断層像に魅せられたのを良く覚えています。それ以来、Bモード断層、パルスドプラ、カラードプラ、マイクロバブルによる造影超音波、強力集束超音波治療(HIFU)、エラストグラフィと、超音波が進んで来た道は、超音波で診断、治療を行なうことは、“超音波で組織を叩いて”進んで来た道と言えます。その道のりをお話させていただきました(図2)。



図 3



図 4



図 5



図 6

海外からの招待講演は、英国から David Cosgrove 先生，中国広州中山大学から呂明德先生，英国 Freeman Hospital から Simon Elliott 先生，SuperSonic Imagine 社から Jacques Souquet 博士にご講演をいただきました。海外招聘講演は，シンポジウムなどの特別企画のキーノートレクチャーなど，シンポジストの一人としてご発表いただき，ディスカッションにも加わっていただく形にして，国際的な企画になるように考えました。講演時間が若干少ない嫌いはあるものの，海外招聘演者や会員から好評であったと思います（図 3，図 4）。

特別企画「安全性」と題して，超音波ガイド下穿刺とくに静脈穿刺と心嚢穿刺についての安全性が議論されました。医療事故について議論が盛んな昨今の医療情勢を鑑みた，時宜を得た企画でした。

特別企画「教育」では，パネルディスカッションとそれに引き続く形の座談会で，研修医のための超音波教育をテーマとして議論されました。近年若い医師の超音波離れが進んでいる一方，整形外科をはじめとする多くの領域で，超音波の重要性が増しています。研修医のときに超音波の有用性に触れ，自

らプローブを持つ習慣を身につけることの重要性が議論されました。座談会では、「誰が，いつ，どこで，どのように」，研修医の超音波教育を行なうのかという問題点が取り上げられ，活発な議論が行なわれました（図 5）。

今回の共催プログラムでは，ハンズオン講習会とハンズオンセミナーに力を入れました。新しい手法の技術的な体得を図るには，実機を使ったデモンストレーションと，聴講者が自ら機器に触れて体感することが必要です（図 6）。

ハンズオンセミナーでは，新しい技術で得られた画像情報の読影を，アンサーパッドを使った Q&A と解説という，参加型のセミナーで行なっていただきました。講師を務めていただいた諸先生のご尽力に敬意を表したいと思います。このハンズオン企画は 3 日間の開催中に 10 コマ以上の共催をいただき，また非常に多くの会員にご参加いただきました。また，機器を準備したり企画を立てたりと対費用効果を度外視した機器メーカーのご尽力にも深く感謝いたします。

5. 機器展示

今回の学術集会では、第一会場の近くの最も広い会場を機器展示会場として使用しました。機器展示は、学術集会の重要な事業の一つであり、参加者は新たに開発された診断機や、未承認の参考展示の機器や技術を目の当たりにし、時には自らプローブを手にしてファントムやモデルのスキャンをすることができ、新技術を知る絶好の機会と言えます。機器メーカー各社も、自社の新機種や新技術を展示し、競合メーカーとしてのぎを削るという緊張感のある場でもあります。

エラストグラフィやフュージョンイメージ、バーチャル穿刺、また3D、4D超音波など、新技術を搭載した機器の展示と画像データの展示が見られ、華やかさと同時に心を躍らせる機器展示でした。機器展示を共催していただいた機器メーカー各社に感謝いたします（図7）。

6. ファイアーサイドトーク

昨年の第84回学術集会では、震災後間もないということで、竹中克会長のご判断でファイアーサイドトークがありませんでした。

何度も強調するようですが、超音波医学会は基礎工学を含めた多くの領域の専門家が一同に集まる学会です。この学術集会でのみ会合する学者や臨床家も多くいることと思います。また、機器メーカーの開発や営業の人も、機器を使用する臨床家と話がで

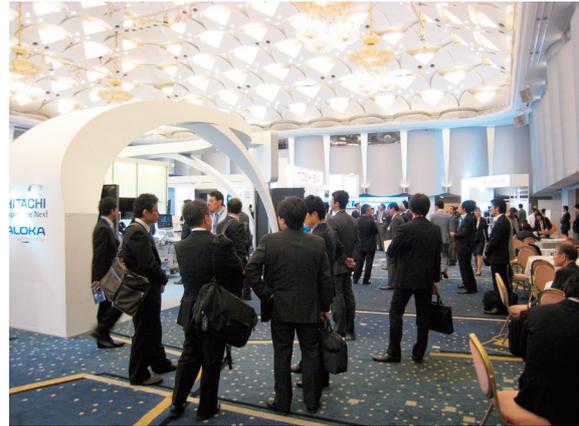


図7

きる重要な機会のひとつと思います。ファイアーサイドトークで交わされる挨拶や会話が、それからの1年の原動力になることと思います。このような機会を提供できるのも会長としてのやりがいにつながっていると思っています。多くの方々に参加いただきありがとうございました。

7. おわりに

2011年の巨大地震の後の大きな余震の心配や、近年の異常気象などがあり、学術集会が開催できなくなったり、参加者が集まりにくくなるような天変地異が懸念されましたが、無事全てのプログラムをつつがなく終えることが出来ました。本当にありがとうございました。最後になりましたが、本学術集会を成功させるため一致団結して全力で協力してくれた教職員や関係者の皆様に感謝いたします（図8）。



図8